

きのこ

【芽出し不良の改善】

芽出し不良や生育不揃いの要因として、培地や種菌に特に問題がない場合は培養環境（特にビン栓）に問題がある事例が多い傾向にあります。また、害菌による芽出し不良の場合は、菌掻き作業時とその後の栽培管理において飛散する病原菌と遭遇させないことが大切です。

1 ビン栓（フィルター）の交換

培養環境において、最も重要なのは「ビン内外の空気の出入り＝ガス交換」が良好な状態を確保することです。ガス交換不足の場合は、培養日数の延長や子実体の揃い不良などが発生の助長します。

まず、新しいビン栓（ウレタンフィルターなど）の一部交換による芽出し不良の改善効果を確認するとともに、交換時期を判断しましょう。また、割れたビンの使用は害菌・キノコバエ等害虫の発生、出荷物への異物混入の原因にもなります。割れビンは、見つけ次第、抜き取って適切に処分しましょう。

2 害菌対策

害菌は人や車、資材などを媒介して施設内に持ち込まれ、知らない間に増殖して広がります。特に、菌掻き～菌糸再生までの段階は、害菌が菌床面に直接的に接触しやすい状態にあります。菌掻き機及び刃部分、菌掻き水、エアア、加湿器など菌床面に接触する可能性があるものは、定期的に清掃と浄化に努めましょう。

○ 巻紙に残った害菌が汚染の原因となることもあります。巻紙の洗浄も徹底しましょう。

【廃培地（使用済み培地）の取り扱い】

きのこの廃培地は事業系一般廃棄物として適正に処理することが義務付けられています。廃培地の飛散や雨水による汚水の流出、悪臭等が問題になる場合がありますので、運搬から保管、堆肥化に至るまではシート等で覆い、頻繁に切り返しを行って、空気を補給するなど適切に行いましょう。

1 廃培地の特性

オガクズ主体の廃培地に比べ、コーンコブ主体の廃培地は掻き出し後の分解が比較的速やかで、また、気温が高く推移している時期は、さらに分解が顕著に促進されます。しかし、分解に際して悪臭が発生して問題となることがありますので注意してください。

2 廃培地堆肥の農地への施用上の留意点

腐熟の進んだものを、播種または植え付けの1か月前までには農地に施用、土壌と混和しておきましょう。未熟なものを施用すると、生育不良の要因となるので注意しましょう。資材や量によって成分はそれぞれ異なりますので、定期的に圃場の土壌診断を行い、堆肥の施用量を調整してください。

表1 廃培地堆肥の成分量の違い（%）

	水分	窒素	リン酸	カリ
オガクズ主体廃培地堆肥	65.9～74.7	0.03～0.05	0.06～0.10	0.01～0.04
コーンコブ主体廃培地堆肥	22.0～81.0	0.6～2.7	1.7～3.5	0.5～1.3

表2 コーンコブ主体の廃培地の堆肥化による成分量の変化

	水分	pH	炭素率	窒素	リン酸	カリ
掻き出し後廃培地 現物	60%	6	24	0.8%	1.2%	0.5%
堆肥 現物	50%	7	—	1.4%	2.3%	0.8%

参考：有機質施用の手引き（長野県2005）、有機質資材適正施用ガイドライン（長野県2007）